

實、いつでも、同じ神の子供等が、敵と味方とに分れて生命の取捨をすることである。どちらが勝つても、どちらが負けても、其の都度、必ず、幾人かの神の子供等が、死傷するだけは間違ない。つまり私共としては、その兄弟の幾人かゞ殺傷せらるゝわけであるから、これは如何にも悲しむべきことである。○戦争の行はるゝ間、律法は沈黙する。(シモロ)「暴君の悪虐なるは、戦争の悪虐なるよりはましである。(ルーテル)又「善き戦争といふものも、悪しき平和といふものも、曾て見たことがない。(フランクリン)などいうた人々もあり。どうせ戦争は悲惨なものであるから、一日も早くこれが絶滅せらるゝ時代の來らんことを、祈らねばならない。(二一四)

◎將軍ヨアブはダビデ王に見え、極めて露骨な言を以て、之を諫めていうた。○斯ては汝は己を憎む者を愛し、己を愛する者を憎むのである。いつそ味方の軍勢が残らず死に、たゞアブサロム一人生き残つたら、王は喜ばれたであらう。しかしさう定つた日には、味方の軍勢は散じ、人々の心は離れて、最早誰も汝の爲に忠義を盡す者はなくなるであらう。果して然らば、これは汝が若き時より今に至るまでに蒙りたる、諸の

災禍よりも更に悪しかるべき旨を、彼は齒に衣させぬ言を以て、王に警告したのである。こゝに至つてダビデは忽ち反省する所あり、出でて邑の門に坐し、人民を見たので、人民はこゝにはじめて、大満足を感じたといふのである。昔から「諫言耳に逆ひ、良薬は口に苦し」といふ。その苦い良薬をダビデは満喫し、その耳に逆ふ諫言を、彼は快く聽き入れたのである。その如く、人は喜んで他人の忠言を受容るゝ襟度がなくてはならぬ。黒田長政は、毎月一回その家來を集めて異見會を催し、部下の者から隔意なき忠告を聞くことを喜んだ、といふ物語が傳へられて居る。(五一八)

◎イスラエルの諸の支派は、今更のやうに、ダビデの過去の功勞を想ひ起した。○王は我等を敵の手より救ひだし、また我等をペリシテ人の手より助けいだせり云々と。彼等はダビデに對する舊恩に報いんことを、心がくるに至つたのである。此の如く人は平生、他人の爲に、眞實なる心盡しをしてさへ居れば、その當座、直に悉くは報いられずとも、その報いられなかつた分は貸方となつて、神の帳簿に登録せられ、適當な時期にその拂戻をせらるゝのである。乃ちモルデカイが、アハシエロス王

を殺さんとする二人の侍従を見出し、之を王に密告して、危険を免れしめたことは、その當時に於ては、何等の報賞もなかつたが、後、王がそれを想ひ起して、彼に榮譽を與へた時には、恰も奸臣ハマーンが、彼を殺さんと圖り居りたる所にて、彼は運よくその爲に、敵の奸計を脱することを得たのである。(エネ六・一一一) 傳道の書に、「汝の糧食を水の上に投げよ。多くの日の後に汝ふたゝび之を得ん」(傳二・二)とあるのは、それである。私共は随分と氣永に、善事善行の貸方にまはつて、盡して見たいものである。(九、一〇)

◎ユダの支派は他の支派に比して、王の還幸を迎へる上に、少しく立遅れの氣味があつた。然しながらダビデが、祭司ザドクとアビヤタルとを通じて、注意を與へたのに感奮し、心を傾けて一人の如くなり、王を迎へん爲に出で來ることゝなつた。彼等はその當初に於ては、立遅れの氣味があつたけれど、その王に對する忠誠に於ては、他の各支派に優つても劣るものではなかつた。言ひ換れば、彼等は機敏に立廻らなかつたけれども、眞實を以て盡したのである。それと同じ様に、私共は人の前に上手で

あり得ないまでも、神の前に誠を盡して居るやうでありたい。昔の人も「巧言令色鮮いかな、仁」又「剛毅朴訥は仁に近し。」などというて居るではないか。(二二―一五)

◎サウルの遺族の一人なるシメイは、前にダビデの蒙塵に際し、石を投げ、塵を揚げ、「汝血を流す人よ」というて、彼を誣うたのであるが、(サム後一六・五)今はその前非を後悔し、公衆の前をも厭はず、身を地に投出して詫言を陳べ、その赦を求めた。今私共が基督に對するも亦之と似て、若し出來ることなら、初から罪を犯さないに如くはない。けれども既に罪を犯した以上、包みかくしなくいひあらはして、その赦を求むる他に、道はないのである。もし罪なしと言はゞ、是みづから欺けるにて眞理われらの中になし。もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞理にして正しければ我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん。(ヨハ壹一・八、九)とあるのは、そのことを教ゆるものである。(二六―二〇)

◎アビシヤイは側から言を出し、「シメイはエホバの膏そゝぎし者を誣ひたるに因りて、其がために誅さるべきにあらずや」というて、異存をのべたが、それにも拘らず

ダビデは彼を赦し、「爾は誅されず」というて神に誓うた。神は人の罪を赦すことを以て、眞の基督者に必要なる行爲と見做し給ふ。すなはち主の祈に「我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。」(マタ六・一二) といふ一節があるのは、その爲である。スタルンの言に、「たゞ勇者のみが人を赦すのである。臆病者は人を赦すことが出来ない」とあり。私共は神の子の血によつて罪を贖はれ、その赦を得たものであるから、又他人に對して何處までも寛大に、之を取扱ふやうでなくてはならぬ。(二二—二三)

二〇 還幸の途上

(サムエル後書第十九章二四—四三)

二一爰にサウルの子メヒボセテ下りて王を逐ふ。彼は王の去りし日より安かに歸れる日まで、其足を飾らず、其鬚を飾らず、又其衣を濯はざりき。二二彼エルサレムより來りて王を逐ふる時、王かれにいひ

けるは、メヒボセテ、爾なんぞ我と共に往かざりしや。二二彼こたへけるは、わが主王よ、わが僕我を欺けり。僕はわれ驢馬に鞍おきてそれに乘りて王の處にゆかんとしへり。僕跛者なればなり。二三しか

るに彼僕を王が主に讒言せり。然れども王が主は神の使のごとし。故に爾の目に善しと見ゆるところを爲し給へ。二四わが父の全家は王が主の前に死人なるのみなるに、爾僕を爾の席にて食ふ者の中に置き給へり。されば我何の理ありてか、重ねて王に哀訴ふることをえん。二五王かれにいひけるは、爾なんぞ重ねて爾の事を言ふや。我いふ、爾とサバ其地を分つべし。三〇メヒボセテ、王にいひけるは、王が主安然に其家に歸りたまひたれば、かれに之を悉くとらしめたまへと。三一爰にギレアデ人バルツライ、ロケリムより下り、王を送りてヨルダンを渡らんとて、王とともにヨルダンを濟れり。三二バルツライは甚だ老いたる人にて八十歳なりき。かれは甚だ大なる人なれば、王のマハナイムに留れる間王を養へり。三三王バルツライにいひけるは、爾我とともに濟り來れ。我エルサレムにて爾を我とともに養はん。三四バルツライ、王にい

ひけるは、わが生命の年の日尙幾何ありてか、我王とともにエルサレムに上らんや。三五我は今日八十歳なり。善きと悪しきとを辨へるをえんや。僕其食ふところと飲むところを味はふをえんや。我再び謳歌之男と謳歌之女の聲を聽きえんや。僕なんぞ尙王わが主の累となるべけんや。三六僕は王とともにヨルダンを濟りて只少しくゆかん。王なんぞこの報賞を我に報ゆるに及ばんや。三七請ふ僕を歸らしめよ。我自己の邑にてわが父母の墓の側に死なん。但し僕キムハムを視たまへ。彼を王が主とともに濟り往かしめ給へ。又爾の目に善しと見ゆる所を彼になし給へ。三八王いひけるは、キムハム我と共に濟り往くべし。我爾の目に善しと見ゆる所をかれに爲さん。又爾が望みて我に求むる所は皆我爾のために爲すべしと。三九民皆ヨルダンを濟れり。王渡りし時、王バルツライに接吻してこれを祝す。彼遂に己の所に歸れり。四〇かくて王ギルガルに進むに、キ

ムハムかれとともに進めり。ユダの民皆王を送れり。イスラエルの民の牛も亦しかり。四一爰にイスラエルの人々皆王の所にいたりて王にいひけるは、我等の兄弟なるユダの人々何故に爾を竊みさり、王と其家族およびダビデともなる其凡の從者を送りてヨルダンを濟りしやと。四二ユダの人々皆イスラエルの人々に對へていふ、王は我に近きが故なり。爾なんぞ此事について怒るや。我等王の物を食ひし

ことあるや。王我等に賜物を與へたることあるや。四三イスラエルの人ユダの人に對へていひけるは、我は王のうちに十の分を有ち、亦ダビデの中にも我は爾よりも多くを有つなり。然るに爾なんぞ我らに輕んじたるや。わが王を導きかへらんと言ひしは、我最初なるにあらずやと。されどユダの人々の言はイスラエルの人々の言よりも厲しかりき。

◎サウルの子メビボセテは、日頃からダビデより殊遇を蒙り、それを有難く思ふの餘、彼が蒙塵中は「其の足を飾らず、其の鬚を飾らず、又其の衣を濯はざりき」とある。しかもそれほどの隠れたる心盡しは、不忠實なる僕チバの爲に蔽はれて、ダビデの知る所とならず、反つてそれとは反對に、彼は恩を仇にしてダビデに叛いた者の如く、讒言せられたのであつた。(サム後一六・三) 此の如く人は時として、その眞實なる心事を他人に認められない爲に、苦しみ悩むことがある。然しながら斯る場合にも、忘れて

ならないのは、隠れたるに見給ふ神の在すことである。(マタ六・四)「天に一の神ありて秘密をあらはしたまふ。(ダニ二・二八)「蔽はれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無し。(マタ一〇・二六)歌に「眼に見えぬ、神だによしと、見給はゞ、人は我が身を、如何に見るとも(和田秀豊)とあり。私共はこゝに安心立命の基を見出すことが出来る。(二四)

◎さるにても、その主人が跛者にて、行動の自由を缺ぐのを奇貨とし、ダビデを欺いて、その主人の産業を横奪したチバの行爲は、赦すべからざるものであつた。艱難に遇ふとき忠實ならぬ者を頼むは、惡しき齒または萎へたる足を恃むがごとし。(箴二五・一九)とは、斯る場合に當嵌る言であらう。私共は又皆僕である。即ち基督の僕として、人類に奉仕する者であるからには、チバの如く不忠實な僕でありたくないものである。〇「僕たる者よ、基督に従ふごとく畏れをのき、眞心をもて肉につける主人に従へ。人を喜ばする者の如く、ただ目の前の事のみを勤めず、基督の僕のごとく心より神の御旨をおこなひ、人に事ふる如くせず、主に事ふるごとく快くつかへよ」(エマ

六・五七）とあるのは、如何にも適切なる教訓である。（二五―三〇）

◎ギレアデ人バルジライは、その地方の有力者にて、齢も既に八十歳に達して居つた。彼は自ら進んで、ダビデがマハナイムに留れる間、之を養うた。そんな真似をして、若しアブサロムが勝利を得ん日には、どんな浮目を見るかも知れない中を、恐れなくて盡力したのは勇敢である。かうした一地方の有志家又有力者は、國家の脊骨である。神の國の支柱である。耶蘇が後に、その十二の弟子を派遣するに當り、「何れの町、いづれの村に入るとも、その中にて相應しき者を尋ねい出して、立ち去るまでは其處に留れ云々」と宣うたのは、此の種の人を指したものと思はるゝ。一地方の光たり鹽たる者は、正しく此の種の人物でなくてはならぬ。（三一、三二）

◎ダビデはバルジライと共に來らんことを望み、「爾我とともに濟り來れ。我エルサレムにて、爾を我とともに養はん。」というたが、バルジライは之を辭し、「わが生命の年の日尙幾何ありてか、我王とともにエルサレムに上らんや。我は今日八十歳なり。善きと惡しきとを辨へるをえんや。僕、其の食ふところと飲むところを味ふをえんや。」

僕は王とともにヨルダンを濟りて、只少しくゆかん。王なんぞこの報賞を我に報ゆるに及ばんや。」というた。彼は足ることを知る者であつた。昔の人が、「仁を求めて仁を得たり。」というたやうに、彼は親切をなさんことを求めて、親切をなし得たのを以て足れりとし、その以上に何の報酬をも求めなかつた。彼は所謂無報酬の奉仕を樂しんだ者である。これは兎角、現金支拂の奉仕を心掛くる者のみ多い世に、珍しき高貴なる振舞をしたものといはねばならない。（三三―三六）

◎バルジライは、自分で王と共に行かない代に、キムハムを推薦した。キムハムはバルジライの子であつたらうとのことである。いづれにしても、彼はバルジライの様な老先短いものと違ひ、今を働き盛りの壯年であつた故、之を推舉したのであらう。諺に「若木の下で笠を脱げ」とあり。若い者は氣力旺盛である。現在と共に將來を有する者であるから頼もしい。若木の下で笠を脱げ」で、若い者の前には頭が下るのである。それにつけても青年壯年者は、その若い間に早く神を認め、御旨を行ふ者となつて居らねばならぬ。汝の少き日に汝の造主を記えよ。即ち惡しき日の來り、年の

よりにて、我は早や何も樂しむ所無しと言ふに至らざる先、また日や光明や月や星の暗くならざる先、雨の後に雲の返らざる中に汝然せよ。(傳二・二・二)と、傳道の書の記者は教へたではないか。(三七―三九)

◎イスラエルの諸の支派は、ユダの支派の者が、王を我がもの顔に伴ひ去るのを見て、不快に覺え、それを詰問すると、ユダの人々は答へて、「王は我に近きが故なり。爾なんぞ此の事について怒るや。我等王の物を食ひしことあるや。王我等に賜物を興へたることあるや」といふ故、イスラエル人も負けては居らず、「我等は十の支派である。汝等はたゞユダとシメオン(シメオンはユダに屬して居つた)と二つの支派に過ぎない。したがつて我等は汝等よりも數倍多く、王を要求すべき權利がある。且又最初に王の還幸のことをいひ出したのは、我等ではないか」といひ、相争うた中にも、ユダの支派の語氣は殊に激しかつたのである。然しながら「柔和なる答は憤恨をとどめ、厲しき言は怒を激す」(箴一五・一)ものである。ユダの人々の激しき言は、不幸にして他の支派との間に、溝渠をつくる原因となつた様に見える。新島襄氏は、その學生の學校に

對し、又教師に對して不満を訴ふるものに答へ、「君等の議論に愛の油を加へよ。」といはれた。たゞ此の愛の油があつてのみ、人と人との間の圓滿なる關係を保ち得るのである。(四〇―四三)

二二 叛逆者シバ

(サムエル後書第二十章)

一爰に一人の邪なる人あり。其名をシバといふ。ピクリの子にしてベニヤミン人なり。彼喇叭を吹きていひけるは、我等はダビデの中に分なし。又エサイの子の中に産業なし。イスラエルよ、各人其天幕に歸れよと。是によりてイスラエルの人皆ダビデに隨ふことを止めてのぼり、ピクリの子シバにしたがへり。然れどユダの人々は其王に附きてヨルダンよりエルサレムに至れり。ミダビデ、エルサレムにある己の家にいたり、王其遺して家を守らせたる姿

なる十人の婦をとりて、これを一の室に守り置きて養へり。されど彼らの處には入らざりき。斯く彼らは死ぬる日まで閉ぢこめられて、生涯嫠婦にてすこせり。四爰に王アマサにいひけるは、我ために三日の中にユダの人々を召び來れ。而して爾此處に在れ。五アマサ乃ちユダを召びあつめんとて往きたりしが、彼ダビデが定めたる期よりも長く留れり。六是においてダビデ、アビシヤイにいひけるは、ピクリの子シバ、今我等にアサロムよりもおほくの害

をなさんとす。爾の主の臣僕を率ゐて彼の後を追へ。恐らくは彼堅固なる城邑を獲て我等の目を逃れんと。七是によりてヨアブの従者とケレテ人とベレテ人および都の勇士、彼に従ひて出てたり。即ち彼等エルサレムより出てピクリの子シバの後を追ふ。八彼等がギベオンにある大石の傍に居りし時、アマサ彼らにむかひ來れり。時にヨアブ戎衣に帯を結めて衣服となし、其上に刀を鞘にさめ、腰に結びて帯び居たりしが、其劍脱け墮ちたり。九ヨアブ、アマサにわが兄弟よ、爾は平康なるやといひて、右の手をもてアマサの鬚を拵へて彼に接吻せんとせしが、○アマサはヨアブの手にある劍に意を留めざりければ、ヨアブ其をもてアマサの腹を刺して、其腸を地に流しだし、重ねて撃つに及ばざらしめて之を殺せり、かくてヨアブと其兄弟アピシヤイ、ピクリの子シバの後を追へり。一二時にヨアブの少者の一人、アマサの側にたちていふ、ヨアブ

を助くる者とダビデに附従ものはヨアブの後に隨へと。一ニアマサは血に染みて大路の中に轉び居たり。斯人民の皆立ちどまるを見て、アマサを大路より田に移したるが、其側にいたれる者皆見て立ちどまれば、衣を其上にかけたり。二三アマサ大路より移されければ、人皆ヨアブにしたがひ進みて、ピクリの子シバの後を追ふ。一四彼イスラエルの凡の支派の中を行きて、アベルとメテマアカに至るに、少年皆集りて亦かれに従ひゆけり。一五かくて彼等來りて彼をアベルメテマアカに圍み、城邑にむかひて壘を築けり。是は壕の中になたり。かくしてヨアブとともにある民皆石垣を崩さんとて之を撃居りしが、一六一箇の哲き婦城邑より呼ばはりていふ、爾ら開けよ、爾ら聽けよ、請ふ爾らヨアブに此に近よれ、我爾に言はんと言へと。一七かれ其婦にちかふるに、婦いひけるは、爾はヨアブなるや。かれ然りといひければ、婦彼にいふ、婢の言を聽け、かれ我

聽くといふ。一八婦即ち語りていひけるは、昔人誠に語りて、人必すアベルにおいて索問べしといひて事を終ふ。一九我はイスラエルの中の平和なる忠義なる者なり。然るに爾はイスラエルの中にて、母ともいふべき城邑を滅さんことを求む。何ゆゑに爾エホバの産業を呑み盡さんとするや。二〇ヨアブ答へていひけるは、決めてしからず。決めてしからず。われ呑み盡し、或は滅さんとすることなし。二二其事しからず、エフライムの山地の人ピクリの子名はシバといふ者、手を擧げて王ダビデに敵せり。爾ら只彼一人を付せ。然らば我此邑をさらんと。婦ヨアブにいひけるは、視よ、彼の首級は石垣の上より

爾に投いだすべし。二三かくて婦其智慧をもて凡の民の所にいたりければ、かれらピクリの子シバの首級を刎れて、ヨアブの所に投出せり。是に於てヨアブ喇叭を吹きならしければ、人々散りて邑より退きて、おのおの其天幕に還りぬ。ヨアブはエルサレムにかへりて王の處にいたれり。二三ヨアブはイスラエルの全軍の長なり。エホヤダの子ベナヤはケレテ人とベレテ人の長なり。二四アドラムは徵募長なり。アヒルデの子ヨシヤバテは史官なり。二五シヤは書記官なり。ザドクとアピヤタルは祭司なり。二六亦ヤイル人イラはダビデの大臣なり。

◎アブサロムの亂が漸くをさまつたかと思ふと、今度はベニヤミン人シバなる者が叛いて、兵を擧ぐるこゝとなつた。此の如く一難が去つたかと思ふと、更に一難が襲ひ來るのは、人間生活の常である様に見える。更に油斷はならないのである。シバが叛

いた近因は、前章の終にある如く、ユダの支派がイスラエルの人々に向ひ、はげしく物いうたことであつたらしい。争端の起源は堤より水をもらずに似たり。この故にあらそひの起らざる先に之を止むべし。(箴一七・一四)「怒を遅くする者は勇士に愈り、おのれの心を治むる者は城を攻め取る者に愈る。(箴一六・三二) などとあり。兎角短慮は事を誤るものと思ひ、注意を怠つてはならない。(一三)

◎アマサは、ダビデの姉妹アビガルの子にて、(歴上二・一七) 前にはアブサロム叛亂の際、其の叛亂軍に將となつたものであるが、後、ダビデに來りつくと、ダビデは彼をヨアブに代つて、その軍の總督たらしめた。(サム後一九・一三) そんなわけであるから、此の度シバの亂に際し、ダビデは先づアマサに命じて、三日の中にユダの支派から軍隊を召集せしめたけれども、彼はその期限内に之を果さなかつた。そこでダビデは、別にアビシヤイに命じ、その隊にある兵を指揮して、シバを討たしむることとなり、自然アビシヤイの兄弟ヨアブも、今一度出で來つて軍に参加したばかりか、寧ろ今一度之を指揮することとなつたのである。アマサは斯して三日といふ期限内に、軍隊を

召集することが出来なかつた。彼は何故かく、三日の間に軍隊を召集し得なかつたかといふに、それは彼がアブサロムについたり、復ダビデに歸つたりして、反覆常なき行動を演じた爲に、人々の信用を缺いたことが、重なる原因であつたらうかと考へられる。人はいくら力量才能の優れたものがあつても、その品性心事に於て、尊信を受くるに足るものがなければ、決して大事をなし得ないのである。新島襄氏の歌に、「主義と立ち、主義と倒れん、我が身なり。浪華の夢の、世にしあらねば。」というてある。私共はその信仰に生き、その主義に立つて、之を一貫せねばならぬ。かの二心兒には、到底ろくな奉仕は出来なからである。(四一七)

◎ヨアブはアマサを暗殺した。これは一軍の大將たるヨアブに不似合な、利己的にして卑怯未練な動作であり。その主人ダビデに對しては又、不遜不忠の致方であつたといはねばならない。ワトソンの言に、「憎悪は悪魔の活畫である。情慾は人を禽獸たらしめ、憎悪は人を悪魔たらしめる。憎悪は心理上の殺人である。それ故『おほよそ兄弟を憎む者は、即ち人を殺す者なり』(ヨハ壹三・一五)と、記されたのである」とあり。

ヨアブはアマサに對する憎惡の念に驅られ、惡魔のやうな殺人罪を犯すに至つたものである。それにしても彼は、何故斯く、その主君ダビデの意向を無視し、其の信用する武將を殺害して憚らなかつたかといふに、それは彼が前に、ダビデの意をうけて、罪もないウリヤを討死させたこともあり、(サム後一・一五)ダビデの弱點を確と握つて居る故、それを恃んで、かゝる我儘氣儘をも、敢てしたものと考へらるゝ。此の如く人は自分に後めたいことがあつては、他から何を仕向けられても、之を咎め立てする資格のないのである。自然言ひたいことも言はず、言うた處でそれだけの力がない。それ故肝要なるは、自分が罪から潔められて、疚しき所なき生活を營んで居ることである。エホバの器をになふ者よ、なんぢら潔くあれ。(イザ五二・一一)とあるのは、如何にも尤も千萬のことである。(八一・三)

◎叛逆者シバが、イスラエルの凡ての支派の中を行きて、アベルとベテマアカに至るに、少年皆集りて亦かれに従ひゆけり」とある。其の如く人は兎角、善でも惡でも、人の眞似をしたがるものである。とりわけ意志薄弱にして、思想圓熟を缺く青年少年

の、先輩に對する關係に於て、其の然るを見るのである。或る有名な裁判官の言に、「私が青年時代に會つた或る先輩等の、いふ所にしたがうて居つたなら、私は今時裁判官となる代に、犯罪者となつて刑務所に呻吟し、若くは悶死して居つたであらう。」というてある。それ故青年少年は、殊に如何なる人の感化の下に身を置くかを、注意せねばならぬ。一人の惡人は許多の善事を壞ふなり。(傳九・一八)というてあるではないか。(一四)

◎一箇の哲き婦が城邑の中から、包圍軍の大將ヨアブに語りて、「アベルの邑は昔から、物のわかつた人の住地として知られ、イスラエルの中でもとりわけ、平和な、忠義者の集合地として、認められて居る。然るに汝は、このイスラエルの中にて、母とも呼ばるべき城邑を滅さんことを求むるか。それは大きな不心得であらう」といふのであつた。婦人が公共のことに携はつた例は、聖書に少からず載せてあり。この無名の哲き婦の前にも、モーセの姉ミリアム、(出五・二〇)士師のデボラ(士五・六)の如き、著名な婦人のことが記してある。女性をしてもつと公共のことに携はらせがよい。

さすれば彼等は、今よりもつと人道、正義、博愛、信仰等の方面に、その善良なる感化を及ぼすべきこと、更に疑ないのである。(二五―一九)

◎ヨアブはその婦人に答へて、彼の求むる所は、たゞ叛逆者シバを得んことにて、その他に何の望む所もない旨を詳にし、邑人は乃ちシバの首を刎ねて、之を城外に投じた爲、最早それより以上に争闘を續くる必要がなくなり、叛亂は治平したのである。モーセの律法に「汝ある邑に進みゆきて之を攻めんとする時は、先づこれに平穩に降ることを勸むべし。その邑もし平穩に降らんと答へて、その門を汝に開かば、其處なる民をして都て汝に貢を納れしめ、汝に事へしむべし。」(申二〇・二〇、二一)とあり。なるたけ干戈を交へずして、事を平和のうちに定めよといふのが、律法の精神であつた。耶蘇も山上の垂訓に於て、「幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と稱へられん」(マタ五・九)と、仰せられて居るのである。(二〇―二六)

二二三年の饑饉

(サムエル後書第二十一章)

「ダビデの世に年復年と三年饑饉ありければ、ダビデ、エホバに問ふに、エホバ言ひ給ひけるは、是はサウルと血を流せる其家のためなり。其は彼嘗てギベオン人を殺したればなりと。是に於て王ギベオン人を召して彼等にいへり。ギベオン人はイスラエルの子孫にあらず。アモリ人の殘餘なりしが、イスラエルの子孫昔彼等に誓をなしたり。然るにサウル、イスラエルとエダの子孫に熱心なるよりして彼等を殺さんと求めたり。三即ちダビデ、ギベオン人にいひけるは、我爾等のために何を爲すべきか、我何の賠償を爲さば、爾等エホバの産業を祝するや。四ギベオン人彼にいひけるは、我等はサウルと其家の金銀を取らじ。又汝は我らの爲にイスラエルの中

の一人一人をも殺す勿れ。ダビデいひけるは、汝等が言ふ所は我汝らのために爲さん。五彼等王にいひけるは、我等を滅したる人、我等を殲してイスラエルの境の中に居留せしめんとて我等にむかひて謀を設けし人、六請ふ其人の子孫七人を我等に與へよ。我等エホバの選みたるサウルのギベアにて彼等をエホバの前に懸げん。王いふ、我與ふべしと。七されど王、サウルの子ヨナタンの子なるメヒボセテを惜めり。是は彼等のあひだ即ちダビデとサウルの子ヨナタンとの間に、エホバを指して爲せる誓あるに因り。八されど王、アヤの女リヅバがサウルに生みし二人の子、アルモニとメヒボセテ、及びサウルの女メラブがメホラ人バルシライの子サデリエルに生

みし五人の子を取りて、九彼らをギベオン人の手に
與へければ、ギベオン人かれらを山の上にてエホバ
の前に懸けたり。彼等七人俱に斃れて、刈穫の初日
即ち大麥刈の初時に死ねり。一〇アヤの女リヅパ麻
布を取りて、刈穫の初日より其屍の上に天より雨
ふるまで、之を己のために磐の上に布きおきて、晝
は空の鳥を屍の上に止らしめず、夜は野の獸をち
かよらしめざりき。二爰にアヤの女サウルの妾リ
ヅパの爲せしことダビデに聞えければ、一三ダビデ
往きてサウルの骨と其子ヨナタンの骨をヤベシ・ヤ
レアデの人々の所より取り。是はベリシテ人がサ
ウルをギルボアに殺して、ベテシヤンの衢に懸けた
るを彼らが竊みさりたるものなり。一三ダビデ其處
よりサウルの骨と其子ヨナタンの骨を携へ上りり。
また人々其懸けられたる者等の骨を斂めたり。一四
かくてサウルと其子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの
地のゼラにて其父キシの墓に葬り、都て王の命じた

一五〇
る所を爲せり。此より後神其地のために祈禱を聽き
給へり。一五ベリシテ人復イスラエルと戦争を爲す。
ダビデ其臣僕と共に下りてベリシテ人と戦ひける
が、ダビデ困憊れ居りければ、一六イシビ・ベノブ、
ダビデを殺さんと思へり。イシビ・ベノブは巨人の
子等の一人にて、其槍の銅の重は三百シケルあり。
彼新しき劍を帯びたり。一七然れどもセルヤの子ア
ビシヤイ、ダビデを助けて其ベリシテ人を撃ち殺せ
り。是においてダビデの従者かれに誓ひていひける
は、汝は再び我等と共に戦争に出づべからず。恐ら
くは爾イスラエルの燈光を消さんと。一八此後再び
ゴブにおいてベリシテ人と戦あり。時にホシヤ人
シベカイ巨人の子等の一人なるサフを殺せり。一九
爰に復ゴブにてベリシテ人と戦あり。其處にてマ
テレヘム人、ヤレオレギムの子エルハナン、ガテの
ゴリアテの兄弟ラミを殺せり。其槍の柄は機の梁の
如くなりき。二〇又ガテに戦ありしが、其處に一

人の身長き人あり。手には各六の指あり。足には
各六の指ありて、其數合せて二十四なり。彼もま
た巨人の生める者なり。二二彼イスラエルを挑みし

かば、ダビデの兄弟シメアの子ヨナタンかれを殺せ
り。二三是らの四人はガテにて巨人の生めるものな
りしが、ダビデの手と其臣僕の手に斃れたり。

◎ダビデの代に三年の饑饉があつた。これはサウルが曾て、ギベオン人を殺したのに
對する天譴であつた。元來ギベオン人は、ヨシユアの時代からの契約があり。(ヨシ九、
二三)「永く奴隸となり、皆神の室の爲に薪を斬り、水を汲み」などする代に、その生
命を助けられて、イスラエル人の間に、生活することを許されて居つた。(ヨシ九・一五)
然るにサウルは、イスラエルとエダとの發展に熱心する餘、古い契約を破つて、ギベ
オン人を殺したことがあり。此の度の饑饉は、それに對する神からの譴責であつた。
といふことは、今日の私共が亦、神の前に立てたる契約を重んずべきことを、教ゆ
るものである。汝、神に誓願をかけなば、之を還すことを怠る勿れ。神は愚なる者を
悦びたまはざるなり。汝はそのかけし誓願を還すべし。誓願をかけてこれを還さざる
よりは、寧ろ誓願をかけざるは汝に善し。(傳五・四・五) 又「誓ひしことは、己に禍害と

なるも變ふることなし。(詩一五・四) などとあるのも、參考すべきことである。(一、二)
 ◎こゝに於てダビデは、ギベオン人に向ひ、「我汝等のために何を爲すべきか。我何の賠償を爲さば、汝等エホバの産業を祝するや」と尋ねると、ギベオン人は答へて、「我等を滅したる人、すなはちサウルの子孫七人を我等に與へよ。我等彼等をエホバの前に懸けん」というた故。ダビデは乃ち、サウルがリヅバによりて生みし二人の子と、又サウル之女メラブが生みし五人の子とを取つて彼等に與へ、彼等が之を殺して木に懸くるに委せた。但しダビデは、ヨナタンの子メビボセテを惜み、彼をギベオン人の手に付さぬやう、取計らうたといふのである。それにつけても問題は、ダビデが此の事について、何故先づ神に問ふことをせずして、反つてギベオン人に尋ねたかといふことである。彼が若し、ギベオン人に尋ねるよりも先に、神の御旨を伺うて居つたなら、或は全然之とは異なる處置を見出したかも知れない、というた人がある。それ故私共は、何をすることも、人の意見を尋ぬる前に、神の旨は如何と問ひ試みねばならぬ。或人がムーデーに向ひ、其の身の將來に對する方針について、忠告を求めると、

ムーデーは「君は今迄、その事に就いて幾人に相談したか。」と尋ねた。「三人に。」と答へると、「その三人は三様の、異なる意見を述べたであらう。人の忠告を求むるよりも、先づ神の御旨のある所を伺ふべきである。」というた。私共は御意のある所を見出し、只管之にのみ従うて歩むべきものである。(三一七)

◎リヅバはその二人の子が殺され、山の上にて木に懸けられたのを見、麻布を取り、磐の上に布いて坐し、晝は空の鳥を、屍の上に止らしめず、夜は野の獸を近寄しめざるよう腐心し、收穫の初時(四月上旬)より降雨期(十月)まで、數ヶ月に互つたといふことである。私共はこゝに又、親心の如何に有難いかといふ實例を見出すのである。本間俊平氏が一囚人の母をその家に訪ねると、彼女は裏の不淨場から出て來ていうた。「刑務所では、不淨場のついた小な部屋に、寢起をすると聞いて居ります。この暑さの際、どの様にか不自由なことであらうと、それを思ひやる爲に、先刻から私は裏の不淨場に入り、かぐんで俵の上を偲んで居つた處であります」とのことに、本間氏は感激して直に刑務所に行き、その次第を俵に聞かすると、彼も甚く胸をうたれ、そ

れから悔改めて、以來眞面目な人間になつたと承知して居る。世にもたふときものは、子を思ふ親心のあらはれである。(八一〇)

◎ダビデは、ヤベシ・ギレアデの人々の所にあつた、サウルとヨナタンとの遺骨を取寄せ、(サム前三・一一一三)之をベニヤミンの地のゼラにて、サウルの父キシの墓に合葬した。その如く私共はせいぜい、死人を手厚く取扱ひたきものである。リレーの言に、「死人については、よきことのほか語らざれ」とあり。マルボロー侯は、ボーリングブローク卿と政敵の間柄であつたが、侯の死後、其のことを悪様に語りて、ボーリングブローク卿の意を迎へんとする者があると、卿はいうた。「マルボロー侯は偉人であつた。彼の徳は私をして、彼の缺點を忘れしめる」と。死人に口なし。」といふ諺もある通、死人は最早、自ら辯解する便宜を有たぬものであるから、それを誹謗するのは、卑怯未練のこと、いはねばならない。私共は死人に對する敬意を失ひたくないものである。(二一一四)

◎復又ペリシテ人との間に戦争があり。ダビデは若い時の様なつもりで、出陣したのであれど、當時彼は早や少くとも六十歳を越えて居り、體力の不充分なため、あぶなく敵の巨人イシビ・ベノブの爲に殺されんとする所を、辛くもアビシヤイによつて救はれた。そこでダビデの従者等は彼を諫め、「汝は再び我等と共に戦争に出づべからず。恐らくは汝、イスラエルの燈光を消さん。」というた。こゝにダビデが、「イスラエルの燈光」と呼ばれた如く、神の聖徒は凡て皆「世の光」である。(マタ五・一四)耶蘇は又曾てバプテスマのヨハネのことを語りて、かれは「燃えて輝く燈火」である(ヨハ五・三五)といはれた。私共は銘々その燈火を消さざるやう、氣をつけつつ、折角銘々の立場から、神の榮光をあらはしたきものである。(二五一七)

◎こゝにイシビ・ベノブと、(一六)サフト、(一八)ラミと、(一九)別に今一人、手足に六本づつの指のある、身長き者と、(二〇)都合四人の巨人が、ペリシテ人の間から現れ、イスラエルを襲うたのであれど、盡く「ダビデの手と、その臣僕の手に斃れた」と記してある。その如く神の僕たる私共は又、上よりの御助により、能く敵の陣中に在る四人の巨人を撃つて、之を斃さねばならぬ。今日の私共が戦ふべき四人の巨人とは、

世俗と、悪魔と、肉慾と、(エヘ二・二・三)死と(コリ前二五・二六)が、それである。いづれも皆、並大抵では克服し難き強敵ではあれど、それさへキリストの御力によつては、充分に打勝ち得べき見込がある。すなはちパウロが、「凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したまふ者に頼り、勝ち得て餘あり。」(ロマ八・三七) というたのは、それである。有難いことではないか。(二八一・二二)

二三 讚美の歌

(サムエル後書第二十二章)

一 ダビデ、エホバが己を諸の敵の手とサウルの手より救ひだし給へる日に、此歌の言をエホバに陳べたり。曰く、ニエホバはわが巖、わが要害、我を救ふ者、三わが磐の神なり。われ彼に倚頼む。エホバはわが干、わが救の角、わが高橋、わが逃躲處、わが救主なり。爾我をすくひて暴き事を免れしめた

まふ。四我ほめまつるべきエホバに呼ばはりて、わが敵より救はる。五死の波濤われを繞み、邪曲なる者の河われをおそれしむ。六冥府の繩われをとりまき、死の機檻われにのぞめり。七われ艱難のうちエホバをよび、またわが神に頼はれり。エホバ其殿よりわが聲をき給ひ、わが嗚呼其耳にいりぬ。ハ

爰に地震ひ、撼き、天の基動き震へり。そは彼怒り給へばなり。九烟その鼻より出でてのぼり、火その口より出でて焼きつくし、おこれる炭かれより燃えいづ。一〇彼天を傾けて下り給ふ。黒雲その足の下にあり。一一ケルブに乗りて飛び、風の翼の上にあらはれ、一二其周圍に黒暗をおき、集まれる水、密雲を幕とし給ふ。一三そのまへの光より炭火燃えいづ。一四エホバ天より雷をくだし、最高者聲をいだし、一五又箭をはなちて彼等をちらし、電をはなちて彼等をうちやぶりたまへり。一六エホバの叱咤とその鼻の氣吹の風によりて、海の底あらはれいて、地の基あらはになりぬ。一七エホバ上より手をたれて我をとり、洪水の中より我を引きあげ、一八またわが勁き敵および我をにくむ者より我をすくひ給へり。彼等は我よりも強かりければなり。一九彼等はわが雷災の日にわれに臨めり。されどエホバわが支柱となり。二〇我を廣き處にひきいだし、われを喜ぶが

ゆるに我をすくひたまへり。二一エホバわが義にしたがひて我に報い、吾手の清潔にしたがひて我に酬し給へり。二三其はわれエホバの道をまもり、惡をなしてわが神に離れしことなければなり。二四その律例は皆わがまへにあり。其法憲は我これを離れざるなり。二四われ神にむかひて完全かり、又身を守りて惡を避けたり。二五故にエホバわが義にしたがひ、其目のまへにわが潔白あるに循ひて、われに報いたまへり。二六矜恤者には爾矜恤ある者のごとくし、完全人には爾完全者のごとくし、二七潔白者には爾潔白者のごとくし、邪曲者には爾嚴刻者のごとくし給ふ。二八難める民は爾これを救ひたまふ。然れど務高者は爾の目見て之を卑くしたまふ。二九エホバ爾はわが燈火なり。エホバわが暗をてらしたまふ。三〇われ爾によりて軍隊の中を驅けとほり、わが神に由りて石垣を飛びこゆ。三一神はその道まつたし。エホバの言は純粹し。彼は都て己に倚頼

む者の干となりたまふ。三三夫エホバのほか誰か神たらん。我等の神のほか孰か誓たらん。三三神はわが強き堅塞にて、わが道を全うし、三四わが足を塵の如くなし、我をわが崇邱に立しめたまふ。三五神わが手に戦を教へたまへば、わが腕は銅の弓をも挽くを得。三六爾我に爾の救の干を與へ、爾の慈悲われを大ならしめ給ふ。三七爾わが身の下の歩を恢廓らしめたまへば、我蹶ふるへず。三八われわが敵を追ふて之を滅し、之を絶やすまではかへらず。三九われ彼等を絶やし彼等を破砕せば、彼等たちえずわが足の下にたふる。四〇汝戦のために力をもて我に帶しめ、又われに逆ぶ者をわが下に拜跪しめたまふ。四一爾わが敵をして我に後を見せしめたまふ。我を惡む者はわれ之をほろぼさん。四二彼等環視せど救ふ者なし。エホバを仰視げと彼等に應

へたまはず。四三地の塵の如くわれ彼等をうちくだき、又衛間の泥のごとくわれ彼等をふみにじる。四四爾われをわが民の争鬪より救ひ、又われをまもりて異邦人等の首長となし給ふ。わが知らざる民我につかふ。四五異邦人等は我に媚び、耳に聞くと均しく我にしたがふ。四六異邦人等は衰へ、其衛所より戦慄ひて出づ。四七エホバは活ける者なり。わが誓は讃むべきかな。わが救の誓の神はあがめまつるべし。四八此神われに仇を報いしめ、國々の民をわが下にくだらしめたまひ、四九又わが敵の中より我を出し、我にさからふ者の上に我をあげ、また強暴人の許よりわれを救ひいだしたまふ。五〇是故にエホバよ、われ異邦人等のうちに爾をほめ、爾の名を稱へん。五一エホバその王の救をおほいにし、その受音者なるダビデと其裔に永久に恩を施したまふなり。

◎こゝに載せられたる讚美の歌は、ダビデが壯年の頃、イスラエルの王位に登つて間

もなく、作つたものであらうといふ説がある。或は又、これは主として、彼が「ダビデの子」なる耶蘇に就いて、預言的に歌ひ出でたものであらうといふ説もある。之を少しく添削したものが、詩篇の第十八篇である。彼は先づ、「エホバはわが巖、わが要害、我を救ふ者、わが磐の神なり。エホバはわが干、わが救の角、わが高檣、わが逃躲處、わが救主なり。」と云うて、神の御名を讚美して居る。彼が幾度か岩窟に身を避け、又は要害に立籠つて敵と戦うた経験から推して考へれば、これらの一語一語が、いづれも皆、意味頗る深長なることを覺えしめる。(二一四)

◎次に彼は、その過去に出會うた幾多の苦難を追懐し、「死の波濤われを繞み、邪曲なる者の河われをおそれしむ。冥府の繩われをとりまさ、死の機檻われにのぞめり。」と云うて居る。しかも彼は、かゝる逆境に身を置きながら、エホバを呼び奉ると、エホバはその叫聲に耳を傾け給うたといふのである。ブース夫人(カサリン)の臨終の辭に、「死の浪は高くあがる。されども私は浪の下を行く者にあらず、反つてその上を乗り超えて進むのである。御身等死を憂ふることなかれ。たゞ善く生きんことを力

めよ。死は憂ふるに足らないのである。」というてあるのも、思ひ合さるではないか。

(五十七)

◎然るのち彼は、神が如何に義憤を以て臨み、悪の勢力を打破して、その聖徒を救ひ給ふかを述べ、「エホバ、上より手をたれて我をとり、洪水の中より我を引きあげ、またわが勁き敵、および我をにくむ者より我をすくひ給へり。彼等は我よりも強かりければなり。」というて居る。私共は弱い。けれども神によつて強くなることが出来る。それ故、能く私共よりも力ある敵をさへ、取挫ぐことが出来る。後にパウロが「我を強くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリ四・一三) というたのは、之と同じ經驗を語つたものである。(八一〇)

◎「エホバ、わが義にしたがひて我に報い、吾が手の清潔にしたがひて我に酬し給へり。」とあるのは、あなたがちダビデが、不斷の體驗を語つたものとはいひ難く、これは寧ろ彼が聖潔の最高調に達した當時を、歌ひ出でたものと見るのが、適當であらう。同様に私共は亦皆罪人である。己が義によつて神の前に出づる價値なき者である。

たゞ基督の血に贖はれ、聖靈によつて潔められて後、聖徒の數に入ることが出来る。使徒ヨハネの書翰に、「もし罪なしと言はゞ、是みづから欺けるにて眞理われらの中になし、もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん。」(ヨハ壹一・八、九)とあるのは、それである。(二二―二八)

◎一箇の聖徒たることは、一箇の戰士たることを意味する。ダビデは神によつて、幾度か眼に餘る大敵と戦ひ、その都度之に打勝つたのである。「われ汝によりて軍隊の中を駆けとほり、わが神によりて石垣を飛びこゆ。」「神わが手に戦を教へたまへば、わが腕は銅の弓をも挽くを得。」「汝、戦のために力をもて我に帶しめ、又われに逆ふ者をわが下に拜跪しめたまふ。」などいうたのは、それである。それと同じ様に、神はまた、今日その聖戦に参加する私共戰士を教へ、導き、助け、用ひて、それぞれの御用に立たせ給ふ。「汝ら主にありて、其の大能の勢威に頼りて強かれ。悪魔の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふべし。我らは血肉と戦ふにあらず、政治、權威、この世の暗黒を掌るもの、天の處にある悪の靈と戦ふなり。この故に神

の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭ひて仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して立ち得んためなり」(エホバ六・一〇―一三)とある通である。(二九―四三)

◎終にダビデは、神が與へ給うた勝利を讃め歌うて居る。「汝、われをわが民の争闘より救ひ、又われをまもりて異邦人の首長となし給ふ。わが知らざる民我につかふ。」
「又わが敵の中より我を出し、我にさからふ者の上に我をあげ、また強暴人の許よりわれを救ひいだしたまふ。」
「エホバその王の救をおほいにし、その受膏者なるダビデと其の裔に、永久に恩を施したまふなり云々。」
私共の神は勝利の神である。神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。(ロマ八・三一) 私共は上よりの力に勵まされ、「勝ちて復勝たん」(黙六・二)とて、出で行くものである。(四四―五一)

二四 最後の言

(サムエル後書第二十三章)

一ダビデの最後の言は是なり。エサイの子ダビデの

詔言、即ち高く擧げられし人、ヤコブの神に膏をそ

そがれし者、イスラエルの善き歌人の詔言、ニエホバの靈わが中において言ひ給ふ、其諭言わが舌にあり。ミイスラエルの神いひ給ふ、イスラエルの聲われに語けたまふ。人を正しく治むる者、神を畏れて治むる者は、四日の出の朝の光のごとく、雲なき朝のごとく、又雨の後の日の光明によりて地に萌えいづる新草のごとし。五わが家かく神とともにあるにあらずや。神萬具備りて鞏固なる永久の契約を我になしたまへり。吾が救と喜を皆いかで生ぜしめたまはざらんや。六然れども邪なる者は荆棘の如くにして、手をもて取りがたければ、皆ともにすてられん。七之にふるゝ人は鐵と槍の柯とを其身に備ふべし。是は火にやけて焼けたゆるに至らん。八是等はダビデの勇士の名なり。タクモニ人ヤシヨベアムは三人衆の長なりしが、一時八百人にむかひて槍を揮ひて之を殺せり。九彼の次はアホアドの子エルアザルにして、三勇士の中の者なり。彼其處に戦

はんとて集まれるベリシテ人にむかひて戦を挑み、イスラエルの人々の進みのぼれる時にダビデとともに居たりしが、一〇たちてベリシテ人を撃ち、終に其手疲れて其手劍に固着て離れざるにいたれり。此日エホバ大なる救拯を行ひたまふ。民は彼の跡にしたがひゆきて只擧取而已なりき。二彼の次はハラリ人アゲの子シヤンマなり。一時ベリシテ人一隊となりて集まれり。彼處に扁豆の満ちたる地の處あり。民ベリシテ人の前より逃げたるに、三彼其地の中に立ちて擧ぎベリシテ人を殺せり。而してエホバ大なる救拯を行ひたまふ。三刈穫の時に三十人衆の首長なる三人、下りてアドラムの洞穴に行きてダビデに詣り。時にベリシテ人の隊レイムの谷に陣どれり。四其時ダビデは要害に居り、ベリシテ人の先陣はベテレムにあり。五ダビデ慕ひていひけるは、誰かベテレムの門にある井の水を我にのましめんかと。一六三勇士乃ちベリシテ人の陣

を衝き、過りてベテレヘムの門にある井の水を汲取りてダビデの許に携へ來れり。然れどダビデ之をのむことをせず、これをエホバのまへに灌ぎて、一七いひけるは、エホバよ、我決して之を爲さじ。是は生命をかけて往きし人の血なりと。彼これを飲むことを好まざりき。三勇士は是等の事を爲せり。一ハゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人衆の首たり。彼三百人に對ひて、槍を揮ひて殺せり。彼その三十人衆の中に名を得たり。一ル彼は三十人衆の中の最も尊き者にして、彼等の長となれり。然れども三人衆には及ばざりき。二〇エホヤダの子カブシエルのベナヤは勇氣あり。多くの功績ありし者なり。彼モアアの人の獅子の如きもの二人を撃殺せり。彼は亦雪の時に下りて穴の中にて獅子を撃殺せり。二一彼また容貌魁偉れたるエジプト人を撃殺せり。其エジプト人は手に槍を持ちたるに、彼は杖を執りて下り、エジプト人の手より槍を振ぎとりて其

槍をもて之を殺せり。二二エホヤダの子ベナヤ是等の事を爲し、三十勇士の中に名を得たり。二三彼は三十人衆の中に尊かりしかども、三人衆には及ばざりき。ダビデかれを參議の中に列らしむ。二四三十人衆の中にはヨアブの兄弟アサヘル、ベテレヘムのドバの子エルハナン、二五ハロデ人シヤンマ、ハロデ人エリカ、二六バルデ人ヘレヅ、テコア人イツケシの子イラ、二七アネトテ人アビエセル、ホシヤ人メアンナイ、二八アホア人ザルモン、ネトバ人マハラ、二九ネトバ人バアナの子ヘレバ、ベニヤミンの子孫のギベアより出たるリバイの子イツタイ、三〇ヒラトン人ベナヤ、ガアシの谷のヒダイ、三二アルパテ人アピアルボン、バホルム人アズマウテ、三三シヤルボニ人エルヤバ、キヅニ人ヤセン、三三ハラリ人シヤンマの子ヨナタン、アラリ人シヤラルの子アヒアム、三四ウルの子エリパレテ、マアカ人ヘヘル、ギロ人アヒトベルの子エリアム、三五カルメル

人ヘヅライ、アルバ人バアライ、三六ヅバのナタンの子イガル、ガド人バニ、ミアンモニ人ゼレク、ゼルヤの子ヨアブの武器を執る者ベエロテ人ナハラ

イ、三八エテリ人イラ、エテリ人ガレバ、三九ヘテ人ウリヤあり。都て三十七人。

◎こゝにダビデの人物を語りて、「高く擧げられし人、ヤコブの神に膏をそゝがれし者、イスラエルの善き歌人」というてある。その如く私共基督に救はれた者は又、皆高く擧げられた人でなくてはならぬ。すなはち「神は憐憫に富み給ふが故に、我らを愛する大なる愛をもて、咎によりて死にたる我等をすら、基督耶穌に由りて基督と共に活かし、共に甦へらせ、共に天の處に坐せしめ給へり。」(エヘ二・四一六)とある通である。又神から膏をそゝがれた者でなくてはならぬ。すなはち「なんぢらの衷には、主より注がれたる油とゞまる故に、人の汝らに物を教ふる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教へ、かつ眞にして虚偽なし。汝等はその教へしごとく主に居るなり。」(ヨハ壹二・二七)とある通である。その結果として、私共はたとひ自分が善き歌の作者でなくとも、少くとも善き歌人として、心から神を讚美し得るやうでなくてはならぬ。すな

はち「酒に酔ふな、放蕩はその中にあり。寧ろ御靈にて満され、詩と讚美と靈の歌とをもて語り合ひ、また主に向ひて心より且うたひ、かつ讚美せよ。」(エエ五・一八、一九)とあるのは、それである。(二)

◎こゝにダビデはその最後の言を述べ、その中に、「正しく治むる者、神を畏れて治むる者は、日の出の朝の光のごとく、雲なき朝のごとく、又雨の後の日の光明によりて、地に萌えいづる新草のごとし。」というて居る。神を畏れて人を正しく治める爲政者は、眞にたふとむべきものである。明治天皇の御製に「千早ぶる神の心を心にて、我が國民を治めてしがな。」又「我が心及ばぬ國のはてまでも、夜晝神は守りますらむ」とあり。陛下は實にかうした敬虔の念を以て、人民に臨み給うたのである。凡人の上に立つ程の人は、その如何なる立場、如何なる地位にあるに拘らず、いづれも皆、神を畏るゝ心を以て、その權威の下に來る人々を、正しく取扱ひたさものである。

(二一四)

◎ヤシヨベアムと、エルアザルと、シヤンマとは、ダビデの部下の三勇士と稱へられ

る者であつた。ヤシヨベアムは曾て槍をふるうて八百人を殺したといへば、その如何に勇猛なる武將であつたかを、察するに足るのである。神はエルアザルとシヤンマとを用ひて、大なる救を行ひ給うたとあり。彼等はその武勇を以て國民を救うたのである。即ち彼等の人に優れた膂力は、専ら人民の福祉の爲に使用せられたのである。その如く基督の軍人たる私共は、所謂三勇士の如く、人に優れた力量があるか否かは別として、少くとも彼等と同じ様に、その同胞の救の爲に、戦うて居るべきものである。願くは、御名の崇められんことを。御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれん事を。(マタ六・九、一〇)とは、私共の一生の大願にて、またその日毎の祈りからである。(八一・一二)

◎「三十人衆の首長なる三人」といふのは、第二組の三勇士にて、即ちアビシヤいと、ベナヤと、アサヘルとを指したものであらう。この三勇士は、ダビデが陣中にあつて、「誰かベテレヘムの門にある井の水を、我にのましめんか。」といふのを聞き、當時、ベテレヘムはペリシテ人の先陣の所在地であつたに拘らず、それを突破して水を汲み來

り、ダビデに獻げた。此は、彼等の勇氣と忠義、又犠牲的精神のあらはれとして、感歎に堪へざる所でつあた。それと同時にダビデは、自分が滅多なことをいひ出した爲、大切な勇士を死地に陥れたのを見て、悔恨し、その水を飲む代に、之をエホバの前に灌ぎて灌祭となし、かくていうた。「エホバよ、我決して之を爲さじ。是は生命をかけて往きし人の血なり」と。彼は之を飲むにしのびなかつたのである。それと似て、私共の主なる基督は、十字架の上にたふとき血を流して私共を救ひ、引續き私共に生命の水を賦與し給ふのである。「まことに誠に、なんぢらに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ。われ終の日にこれを甦へらすべし。夫わが肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。」(ヨハ六・五三―五五)と、彼が宣うたのは、それである。ダビデが三勇士の生命をかけて得來つた水を飲むに忍びなかつたやうに、私共は又基督が、そのたふとき犠牲によつて備へ給うた生命の水を、あだやあるそかのことに考へず、勿體なく戴いて、靈魂の渴をいやさん爲に、拜受すべきものである。(一三一―一七)

◎第二組の三勇士の中にて、ベナヤはその大勇を以て多くの功績を樹てた中にも、彼は、「モアブ人の獅子の如きもの二人を撃殺せり。」又「雪の時に下りて、穴の中にて獅子を撃殺せり」とあり。彼はサムソン、(士一四・六)又青年時代のダビデ(サム前一七・三五)と同じ様に、獅子と格闘して、之を手討にしたといふのである。然るに使徒ペテロの言に、「慎みて目を覺しをれ、汝らの仇なる惡魔、ほゆる獅子のごとく歴廻りて、呑むべきものを尋ぬ」(ペテ前五・八)とあり。私共も亦、或る意味に於ては、獅子と格闘すべき立場におかれたものである。すなはち惡魔と名づくる吼ゆる獅子を對手に、之と闘ふべき運命を有するもの故、日頃から目を覺し居り、又「信仰を堅うして彼を禦ぐ」(ペテ前五・九)べき必要がある。神は能く私共を助けて、さらした強敵にさへも打勝たせ給ふち方である。(一八一―二三)

◎ダビデの部下には、前に述べた二組の三勇士の他に、別に三十餘人の勇士があり。それらが中堅となつて、彼の治政を助けたのである。彼等はその當時にあつて、イスラエル民族の支柱であつた。其の如く何時の時代にも、神はその御國の支柱となり、

その軍隊の中心人物たるべき者を要してゐ給ふ。初代の基督教會には、「柱」と思はる人物が三人あり。すなはちヤコブとペテロとヨハネとが、それであつた。(ガラ二・九)或は之に今一人、パウロを加へて、初代基督教會の四本柱と名づけた人もある。私共はたとひ、そんなざぐれた人々の眞似は出来ずとも、少くともその身を置く地方、若くはその屬する團體に於ての柱石となり、中心人物となること、出来ない筈はないと思ふ。少くとも私共は、基督の軍隊に於ける、勇士の一人でありたきものである。(二四―三九)

二五 無代價の獻物をせず

(サムエル後書第二十四章)

一 エホバ復イスラエルにむかひて怒を發し、ダビデを感動して彼等に敵對しめ、往きてイスラエルとエダを敷へよと言はしめ給ふ。二 王乃ちヨアブおよびヨアブとともにある軍長等にいひけるは、請ふイ

スラエルの諸の支派の中を、ダンよりベエルシバに至るまで行きめぐりて、民を核べ、我をして民の數を知らしめよ。三 ヨアブ、王にいひけるは、幾何あるとも願はくは汝の神エホバ民を百倍に増し給へ。

而して王が主の目それを視るにいたれ。然りといへども王が主の此事を悦びたまふは何故ぞやと。四 されど王の言ヨアブと軍長等に勝ちければ、ヨアブと軍長等王の前を退きてイスラエルの民を核べに往けり。五 彼らヨルダンを濟りアロエルより即ち河の中の邑より始めて、ガドにいたり、ヤセルにいたり、六ギレアデにいたり、タテムホデシの地にいたり、又ダニヤンにいたりて、シドンに旋り、七またツロの城にいたり、ヒビ人とカナン人の諸の邑に至り、ユダの南に出ててベエルシバに至れり。八 彼等國を徧く行きめぐり、九月と廿日を経てエルサレムに至りぬ。九 ヨアブ人口の數を王に告げたり。十 即ちイスラエルに劍を抜く壯士八十萬ありき。又ユダの人は五十萬ありき。一〇 ダビデ民の數を書きし後、其心自ら責む。是においてダビデ、エホバにいふ、我これを爲して大に罪を犯したり。願はくはエホバよ僕の罪を除き給へ。我甚だ愚なる事を爲せ

りと。一 一 ダビデ朝起きし時、エホバの言ダビデの先見者なる預言者ガデに臨みて曰く、二 往きてダビデに言へ、エホバ斯いふ。我汝に三を示す。汝その一を擇べ、我其を汝に爲さんと。三 ガデ、ダビデの許に至り、之に告げて之にいひけるは、汝の地に三年の饑饉いたらんか、或は汝敵に追はれて三月其前に逃げんか。或は爾の地に三日の疫病あらんか。爾考へてわが如何なる答を我を遣はせし者に爲すべきかを決めよ。四 一 ダビデ、ガデにいひけるは、我大に苦しむ。請ふ我等をしてエホバの手に陥らしめよ。其憐憫大なればなり。我をして人の手に陥らしむるなかれ。五 是においてエホバ朝より集會の時まで、疫病をイスラエルに降したまふ。ダンよりベエルシバまで民の死れる者七萬人なり。六 天の使其手をエルサレムに伸べて之を滅さんとしたりしが、エホバ此害惡を悔いて、民を滅す天使にいひ給ひけるは、是れり。今汝の手を止めよ。時に

エホバの使はエブス人アラウナの禾場の傍にあり。一七ダビデ民を撃つ天使を見し時、エホバに申していひけるは、嗚呼我は罪を犯したり。我は悪しき事を爲したり。然ども是等の羊群は何を爲したるや。請ふ爾の手を我と我父の家に對給へと。一八此日ガデ、ダビデの所に至りて彼にいひけるは、上りてエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建てよ。一九ダビデ、ガデの言に隨ひ、エホバの命じ給ひし如くのぼれり。二〇アラウナ觀望て王と其臣僕の己の方に進み來るを見、アラウナ出てて王の前に地に伏して拜せり。二一かくてアラウナイひけるは、何に因りてか王が主僕の所にきませるや。ダビデいひけるは、汝より禾場を買ひとり、エホバに壇を

築きて、民に降る災をとめんとてなり。二二アラウナ、ダビデにいひけるは、願くは王が主其目に善しと見ゆるものを取りて獻げ給へ。燔祭には牛あり、薪には打禾車と牛の器ありと。二三アラウナこれを悉く王に奉呈ぐ。アラウナ又王に、れがはくは爾の神エホバ爾を受納れたまはんことをといふ。二四王アラウナにいひけるは、斯くすべからず。我必ず値をはらひて爾より買ひとりらん。我費なしに燔祭をわが神エホバに獻ぐることをせじと。ダビデ銀五十シケルにて禾場と牛を買ひとり。二五ダビデ其處にてエホバに壇を築き、燔祭と酬恩祭を獻げたり。是においてエホバ其地のために祈禱を聽きたまひて、災のイスラエルに降ること止まりぬ。

◎歴代史略には、こゝにあるのと同じ出來事を記し、「茲にサタン起りてイスラエルに敵し、ダビデを感動して、イスラエルを核數しめんとせり云々」(歴上一・一)というてある。悪魔はいつも隙を覗ひ居りて、神の聖徒を誘はんとするものであるから、少し

も油斷は出來ないのである。人民の數をかぞへることは、モーセの時代に既に二回迄も行はれた處で。(民一・二、同二六・二)それが此の度に限り、非常な罪惡であつたのは、如何なるわけかと尋ぬるに、それは主として、ダビデの高慢心に原因するのであつた。後にバビロン王ネブカデネザルが、王宮の上を歩みつゝ、「此の大なるバビロンは、我が大なる力をもて建てて京城となし、之をもてわが威光を輝かす者ならずや」(ダニ四・三〇)というた如く、ダビデは又領内の人口をかぞへ、その數の多きを誇とし、我こそイスラエルあつての最大の王者であれとて、自からの虚榮心を満足せしめんとした。それが神の御旨に副はなかつたのである。箴言の記者は、エホバの憎み給ふもの七つをかぞへ、「驕る目」(箴六・一七)を第一にあげた。今ダビデはその驕る目を以て、罪を犯すことゝなつたのである。しかも「驕傲は滅亡にさきだち、誇る心は傾跌にさきだつ」(箴一六・一八)ものであるから、誰も注意を怠つてはならない。(二一四)

◎ヨアブはダビデを諫めて、その計畫を思ひ止まらせんとしたけれども、用ひられず、餘儀なく軍長たちと共に、民を核へん爲に出で往いた。彼等はヨルダンの河東から

はじめて北地に出で、シドンとツロとを経て、ユダの南に出で、ベエルシバに至り、かくして國を偏く廻り、九月と二十日の後にエルサレムに歸り、調査の結果を王に告げた。すなはちその當時、イスラエルに劍を抜く壯士八十萬、ユダに五十萬をかぞへたのであつた。ダビデは人民の數を核べて後、その心、内に自ら責めて堪へ難くなり、神に向ひて、「我これを爲して大に罪を犯したり。願くはエホバよ、僕の罪を除き給へ。我甚だ愚なることを爲せり」と訴へた。彼が若し十ヶ月前に、それだけ自ら反省して居つたら、仕合であつたらうに。所謂「後悔先に立たず」。彼は事後に至つて、はじめて良心の聲を聞いたのである。然るに良心の聲は神の聲であるから、彼が遅滞ながら之に心の耳を傾けたのは、嘉すべきことであつた。その如く私共は又、いつも良心を通じて語り給ふ、神の御聲に敏感でなくてはならぬ。良心は人の罪を審く法廷であると共に、又之を懲罰する爲の刑務所である」というた人もあり。私共は神の御助によつて、いつも良心の責なき生活をして居りたきものである。(五十一〇)

◎神はダビデに向ひ、七年の饑饉か、三ヶ月の奔竄か、三日の疫病か、三つの中の一つを選ぶべきことを命じ給ひ、ダビデは甚くその返事に苦しんだ。然る後、彼は「たの請ふ、我等をしてエホバの手に陥らしめよ。其の憐憫大なればなり。我をして人の手に陥らしむるなかれ」と。この場合に於けるダビデは、その昔、七難八苦の中に身をおいしたヨブが、「彼われを殺すとも我は彼に依頼まん。(ヨブ一三・一五)」というたやうに、その生くるも死ぬるも、立つも倒るるも、たゞ御意のまゝに委せ奉るべき覺悟を、定めたのであつた。奥野昌綱の歌に、「うちたまへ、たゞうちたまへ、我が父よ、うちたまふとも、我を捨つるな。」とあり。神の御旨を痛めてその懲罰をうくる身に、なし得べき只一つのことば、悪びれず、その鞭の下に身をおいて、神の最善の御旨に一切を委せ奉ることである。(二一―一五)

◎天の使はその手をエルサレムに伸べて、之を滅さんとするのを、神はおし止めて、「足れり。今汝の手を住めよ。」と宣うたとあり。如何なる災禍も神の御許のない所には、決して襲ひ來らないのである。それ故悪魔がヨブを試むるに當りても、たゞその神から許された範圍に於てのみ、彼に打撃を加へ得たのである。(ヨブ一・二二、同二・六) 玉子

の白味が黄味を取巻く如く、神の御保護は彼に依頼む者を、取巻いて居るのである。「二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや。然るに汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。この故に恐るな、汝らは多くの雀よりも優るゝなり。」(マター一〇、二九、三一)とあるのは、またこの道理を教ふるものである。(二六)

◎ダビデは民を撃つ天の使を見た時、エホバに申して、「嗚呼我は罪を犯したり。我は悪しき事を爲したり。然れども是等の羊群は何を爲したるや。請ふ、汝の手を我と我が父の家に對け給へ。」と祈つた。ダビデ一人の罪は多くの民を災禍に陥れたのである。その如く罪はその之を犯せる當人に止らず、他の多くの人々に、取返のつかない迷惑をかけるものである。そのことにつき、パウロは、「それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人罪を犯しし故に、死は凡ての人に及びべり。」(ロマ五・一二)というた。罪のゆるがせにすべからざることが、それにも思ひ知らるゝではないか。さりながらその一人の人アダムは、「來らんとする者の型」(ロマ五・一四)である。私共はアダムによつて死ぬる者となつた如く、又一人の人耶蘇基督に

よつて、生命を得るに至つたのである。眞に忝いことゝいはねばならない。(一七)

◎ダビデは神の命に従ひ、エブス人アラウナの禾場にて、エホバに壇を築き、燔祭を神に獻げて、民に降る災禍をとゞめんことを、祈ることゝなつた。アラウナは厚意の限をつくして之を迎へ、「願くは王、わが主、其の目に善しと見ゆるものを取りて獻げ給へ、燔祭には牛あり、薪には打禾車と牛の器あり。」というたが、ダビデは肯かず、アラウナに向ひ、「我必ず値をはらひて汝より買ひとらん。我費なしに燔祭を、わが神エホバに獻ぐることをせじ」といひ、銀五十シケル(銀一シケルは我が一圓三十錢に當る)にて、禾場と牛とを買ひとりと、其處に壇を築いて、燔祭と酬恩祭とをエホバに獻げた。その如く私共も、無代價の獻物を神に獻ぐることを以て、満足してはならない。神が獨子を世に賜うたのは、私共の爲に價高き犠牲を拂ひ給うたのである。それ故私共が神の恵に報ゆる爲にも亦、その爲に相當の犠牲を拂ふことを、喜ぶやうでなくてはならぬ。主は我らの爲に生命を捨てたまへり。之によりて愛といふことを知りたり。我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。(ヨハ壹三・一六)とあり。ウイリアム・ブー

ス大將は曾て、この場合に於けるダビデのことに基つき、「無代價の獻物をすな」といふ一文を書き、救世軍人がそれぞれ身をつめて、必要のものをも克己し、他人の救の爲に盡瘁すべきことを教へられた。私共はこの場合に於けるダビデから、學ぶべき所が多くある。(二八一―二五)

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the word "救世軍" and other characters.)

Printed in Japan

昭和十一年九月十日印刷
昭和十一年九月十五日發行

不許
複製

發行所

平野軍山 圖書室

定價金九拾錢

編輯兼發行者
救世軍日本本營
山室軍平

印刷者
龜谷良一
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所
日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

東京市神田區神保町二丁目十七番地
救世軍出版及供給部
(振替東京四四〇〇番)

「民衆の聖書創世記」に就き

徳富蘇峰先生曰く

世の中には、四書大全と同様に、聖書の註脚も、山の如くある中には屋上屋を架し、地下室の下に地下室を鑿つが如く、数限りもない。而して更らに高等批評なるものありて、註脚愈よ出て、聖書の本旨を去る倍々遠からしむるの嘆を發せしむるものがある。然るに君の註脚は、如何にも簡單明快だ。而して君は恒に聖書を解くに聖書を以てしてゐる。君は曰く、「第一、一切の批評的論辯を避け、聖書を有るがまゝに受取つて、その中から學ぶ所あらんと試みた」と。良とにその通りだ。又た曰く「第二、聖書の各章に基づき、つとめて心靈的、又實際的の教訓、各數ヶ條を見出さんと心掛けた」と。是亦た其通りだ。又た曰く「第三、又出来るだけ、平易通俗の文字を用ひ、簡單明瞭に之を記述せんと苦心した」と。是亦た其の通りである。

中將山室軍平著 民衆の聖書舊約の部

創世記

錢十八 價定 錢八 料送

出エジプト記

錢十九 價定 錢八 料送

民數紀略・申命記

錢十九 價定 錢八 料送

ヨシユア記・士師記附ルツ記

錢十八 價定 錢八 料送

聖書

聖書の歴史

聖書の歴史は、神の御旨に従って、預言者や著述者によって書かれた。その歴史は、神の御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。聖書の歴史は、神の御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。聖書の歴史は、神の御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。

中野山恒平著 民衆の聖書約の部

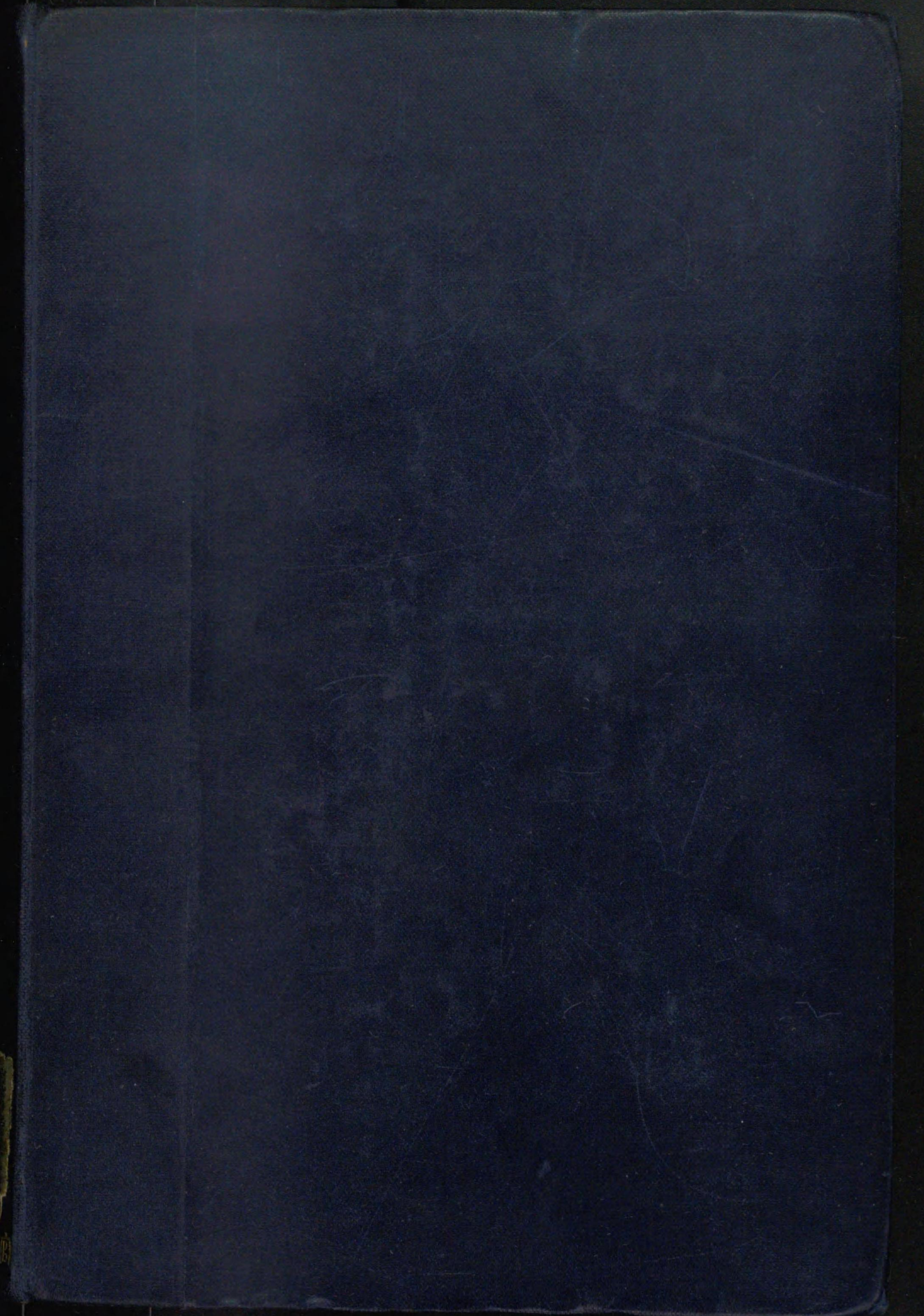
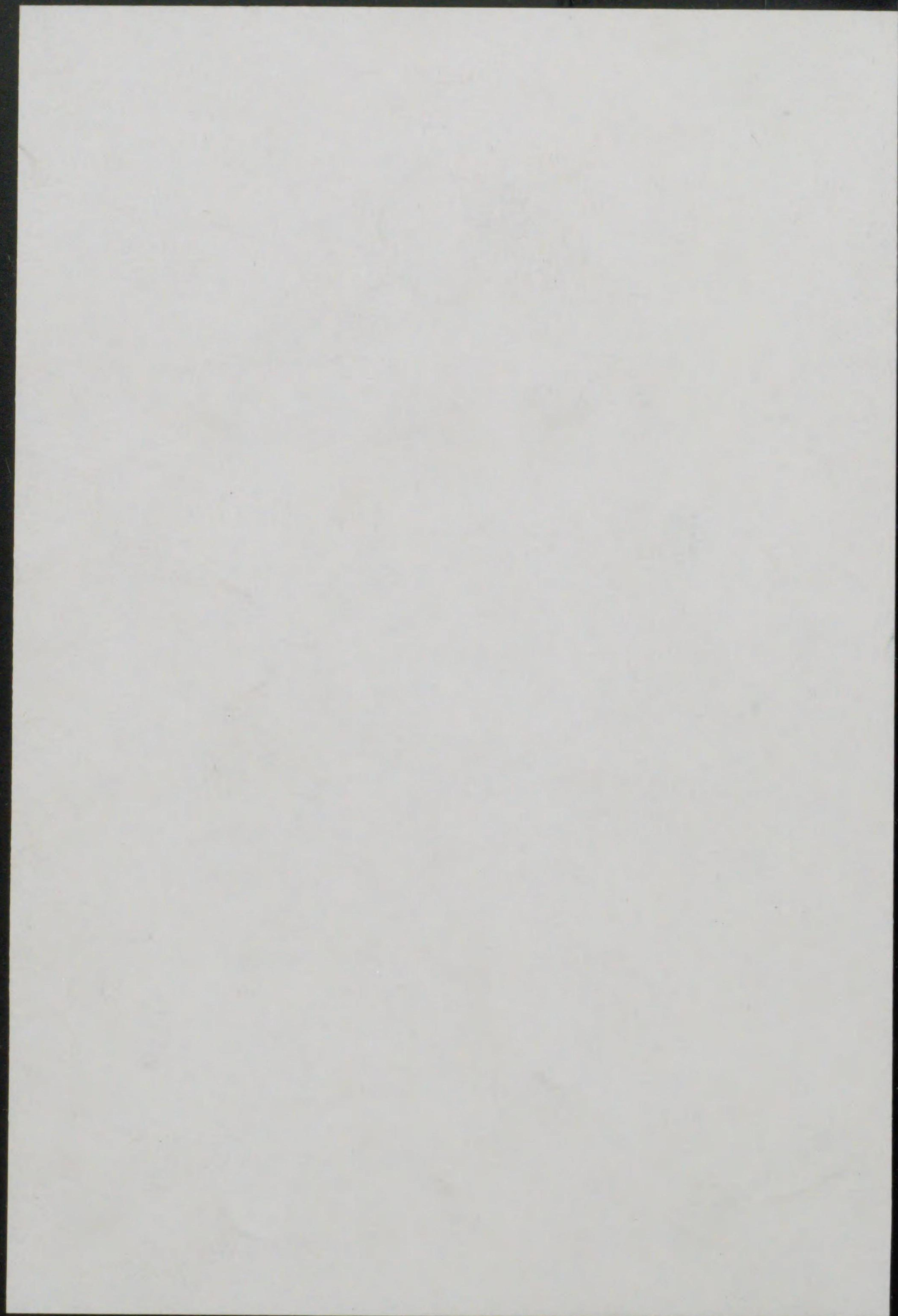
創世記	出エジプト記	民衆紀略・申命記	ヨシヤア記
士師記	サムエル記	列王紀上	列王紀下
エズラ記	ネヘミヤ記	エステル記	マカビ記
ヨハネ福音書	使徒行伝	コリント書	ガラテヤ書
ローマ書	エペソ書	コロサコ書	テモトニヤ書
ヘブル人への手紙	ヤコブ書	ピテラスの手紙	ユダヤ人の手紙
黙示録	福音書	使徒行伝	書翰

新約聖書の歴史

新約聖書の歴史は、イエスキリストの御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。新約聖書の歴史は、イエスキリストの御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。新約聖書の歴史は、イエスキリストの御業と御言葉を伝えるための聖典として、教会に受け継がれてきた。

100

714
64

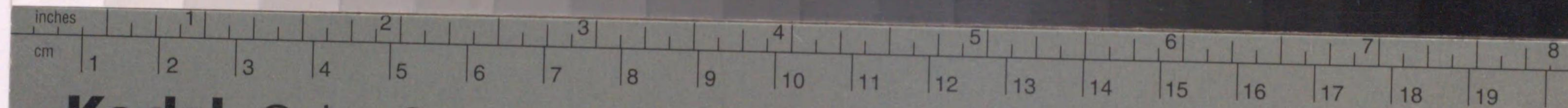


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

